

Title	昭和56年度三田史学会大会について；姜晋哲氏の講演会について；昭和五五年度修士論文要旨；昭和五六年度提出卒業論文題目；昭和五六年度提出修士論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.4 (1982. 3) ,p.126(550)- 134(558)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0126">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0126</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

によって、はじめて為し得たものと称して差し支えなく、本論文の説く所をさらに十分検討することによって、日本考古学の新たな展開が見られることを期待して止まない。

ただ本論文によって研究が完成されたわけではなく、上述のような幾つかの点については再検討の余地があるうかと思われるのも当然のことであろう。

しかしながら、著者の研究と視点には新らたな進歩と大成を窺うに足るものがあることはいうまでもなく、現時点において、この優れた業績をあげた著者は文学博士の称号を帯びるのに十分な資格があるものと判定する。

昭和五十七年三月五日

論文審査担当者 主査 慶応義塾大学教授 文学博士 清水潤三  
前東京教育大学教授 八幡一郎  
早稲田大学教授 西村正衛  
慶応義塾大学教授 伊藤清司

### 昭和56年度三田史学会大会について

昭和56年度の本学会大会は、12月5日(土)三田キャンパスにおいて開催された。内容は左記の通りである。なお、同時に行なわれた総会で、河北展生教授が新会長に就任した。また、夕方山食において懇親会があり約50名が出席した。

### 研究発表

国史部会 第一校舎一〇四番教室

- 1 天保期小田原藩における鉄砲取調人について  
— 御殿場地方の事例を中心に —  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 平野 裕久氏
- 2 家茂時代幕閣の変遷と幕権強化  
— 元治元年六月幕閣の更迭と其意義 —  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 高輪 真澄氏
- 3 幕末期の対馬藩と対朝鮮政策  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 木村 直也氏
- 4 東寺の俗別当をめぐって  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 湯浅 吉美氏
- 5 上野国新田庄の有徳人  
慶応義塾普通部 小谷 俊彦氏
- 1 東洋史部会 第一校舎一〇六番教室  
1 一世紀後期のファールス地方における Khumar-Tegin  
政権について—セルジューク朝下のアタベク政権発生史—  
図書館資料整備センター 森川 孝典氏
- 2 清代社会制度の一考察  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 家室 茂雄氏
- 3 嘉靖海寇反乱史研究の動向と若干の問題点  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 伊藤 公夫氏
- 4 楚の孫叔敖について  
東海大学 安倍 道子氏
- 西洋史部会 第一校舎一〇七番教室
- 1 初期ビザンツにおける 'circus faction' の宗教的背景について  
慶応義塾大学(大学院修士課程) 稲田 浩氏
- 2 ジュール・ミシュレの歴史認識—'peuple' の概念を中心に—

慶応義塾大学(大学院修士課程) 鈴木 克夫氏

3 ヴィクトリア時代の世界像と「文化帝国主義」

広島修道大学 東田 雅博氏

4 一三世紀初頭の騎士 慶応義塾大学 森岡敬一郎氏

民族学・考古学部会 第一校舎一〇二番教室

共通テーマ「考古学と自然遺物」(スライド使用)

司会 慶応義塾大学 近森 正氏

a 事例研究

1 貝塚における自然遺物分析の視角

慶応義塾大学 鈴木 公雄氏

2 貝塚における貝殻の数量的分析

慶応義塾大学(大学院修士課程) 小沢かおる氏

b コメント

慶応義塾大学 近森 正氏

慶応義塾大学 高山 博氏

東京大学 赤沢 威氏

c シンポジウム

### 公開講演 西校舎五一七番教室

1 遣唐使船研究の諸問題 慶応義塾大学教授 清水 潤三氏

2 考古学上から見た韓半島東南部の諸問題

東亜大学教授・慶応義塾大学訪問教授 金 東 鎬氏

### 姜晋哲氏の講演会について

本塾史学科卒業生で、現高麗大学教授姜晋哲氏は一九八一年秋の連合三田会出席のため来日された。本会ではその機会に教授をお招きして、講演会と歓迎パーティーを開催した。

日時 十一月六日(金)午後五時—八時

場所 第一校舎一二番及び野口ルーム

演題 高麗土地制度の研究

### 昭和五五年度修士論文要旨

班給基準に関する基礎的考察

— 収授規定および受田年齢との関連において —

山 本 行 彦

小稿は、「班給基準」の問題に焦点を定め、大宝令六年一班条の復原、および口分条「五年以下不給」の復原・法意解釈について、基礎的な考察を行なったものである。

まず六年一班条については、大宝令と養老令の間に、法の内容にかかわる重要な相違が存在したと思われ、その復原条文についても未だ定説をみるに至っていないのが現状である。

そこで第一に、古記の「初班」概念には、(a)任意の第一回の班年、(b)六年(間)、(c)六年(目)を指す三種類の概念が混用されている。とする明石一紀氏の理解を基本的に支持し、あわせて「三班収授」との関連において数系列、班数呼称を整理した。

第二に、従来難解とされてきた同条古記の「班謂約六年之名、

仮令初班死再班収也(下略)」という史料の「約」は、紅葉山文庫本の「コム」という訓に従って、「(班年)の」班とは、(班期が六年間であるので、班年も)六年(目)である。という意味をコマタ(約)名称である」と訓むべきであり、それ故に、「班年」の班を具体的に説明するために掲げられた「仮令」以下は、任意の第一班期Ⅱ「初班(期)」のうちに身「死」した場合は、次回の「班年」Ⅱ「再班(之年)」に「収」授する、というだけのことであり、それ以上のものではないとした。

第三に、「後年」とは、律令あるいは集解における用法と比較検討した結果、「初班(期)」を除く「再班(期)以後」と理解すべきであるとした。

第四に、「初班」と「三班収授」の結合については、王事条古記の「初班之年、知不還収、三班収授」に従って、「初班不収三班収授」と復原した。「還収」という語は、当時の諸史料に散見する語で、ほぼ「収授」と同義に解し得るからである。

以上の論拠によって、最終的に到達した私の復原案は、以下の如くである。

凡田六年一班、神田寺田、不在<sub>レ</sub>収授之限、若以<sub>レ</sub>身死<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>収<sub>レ</sub>田者、初班不<sub>レ</sub>収、三班収授、後年毎<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>班年<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>収授。

(但し、現在は「神田」条項を別条とする、二ヶ条説が正しいと考える。)

次に、「五年以下不給」については、年齢制限を規定したものではない、とする前記明石説を再検討した。

即ち、これは従来「六歳以上受田制」を規定したものと理解さ

れてきたが、明石説は、「班年」Ⅱ「六年(目)」を持って給え、という法書を表わしたものに外ならず、従って、班田収授制には年齢制限は存在しなかった、というものである。

そこで第一に、『類聚国史』延暦十一年閏十一月壬辰条には、「浪加生年」という記事があり、これは年齢制限が存在したことを示す史料に外ならないことを明らかにした。

第二に、明石説が明らかにした、古記の「初班(年)」Ⅱ「六年(目)」説は正しいが同説は、大宝令の「五年以下不給」規定を復原し得る唯一の史料である授田古記「初班年、五年以下不給」の読解に根本的な誤りがあり、これは「初班年(即ち、生後第一回目の班年は六年目であるので)五年(間)以下の者には給わざるなり」と訓まれるべきで、同説の如く、どの「班年」にも適用される規定ではなく、「初班年」を迎えた者のみに適用される規定であることを明らかにした。

従って、実質的には、従来の如く、「六歳以上」が受田対象者であったことに外ならないが、この史料からすると、大宝令には「五年以下不給」の上に「初班年」という語が存在したことが確認される。

およそ以上の論証によって、浄御原令の班田収授制には、虎尾俊哉氏が主張されるように、年齢制限は存在しなかったと考えられるが、大宝令において口分条に「初班年、五年以下不給」という規定が挿入されて、班給規準に年齢制限が付加されたものと思われる。そして、大宝令施行にともなう過渡的優遇措置として、六年一班条に「北魏令を参照して」「初班」期の死者のみ「三班

収授」とする特例が設けられた、と推定した。

また、遅くとも養老令施行にともなうて、六年一班条の「初班(死)」優遇規定が廃止されるとともに、口分条の「初班年」も捨象されたが、「五年」とは、実質的に、「五歳」ということに外ならなかったので、実質的内容は同一のまま、養老令施行下も存続した。

### 『類聚三代格』その他にみえる違勅罪について

長谷山 彰

(五一卷三号に「違勅罪について」と題して収録されているため、省略)

### 静岡県加茂郡稲取村入谷区農家共同救護社に

#### 関する粗描

大橋 忍

本論文は江守五夫氏の『明治期模範村と老農の研究—静岡県(旧)稲取村の村落構造と老農田村又吉翁の事蹟について』(その一)、(その二)の二編から成り立っている。V(法律論叢第41巻1号、同第42巻3号所収)、『日本村落社会の構造』所収『第二編 明治国家と村落共同体』に多く依拠するものであり、史料的には、共同救護社保存の諸帳簿類と村長田村又吉翁(救護社創設の有力メンバー)の京都府何鹿郡での講演『稲取美談』に依拠している。

本論文は第一章においては、救護社及び諸会(救護社定款に附属機関とされる青年夜学校・母会・処女会と耆老会)の意義を従

来の学説を参照して仮説的に提示したものである。つまり従来の学説においては報徳社及びその諸会(年令階梯組織)を日露戦後経営期(あるいは寄生地主制下での)に照点をあてているため国家的又は地主的要請を受け入れる「自発性」・公共心・公德心を養成する装置の役割を果たしていたとされる。しかし明治20、30年代は地主的秩序へ農民を従属させようとする段階(中・小地主層と小農民の利害の顕在化している段階)ではなく、小農民の(私)の最大限をも許容することによって近代的農村共同体の再編成をおこなおうとした一面が含まれる段階ではなからうかと推測したものである。

第二章は救護組合(社)諸帳簿類によって組合(社)の経済活動(資金積立・貸附・返済)を通しての特色を分析検討した。その結果、入谷区が繭による資本主義経済の仕組への本格的参加の始まる大正期とそれ以前の明治期では、その特色に変化が生じているであろうことが推測された。すなわち明治期においては比較的、共同救護の性質が強くみられる。しかし大正期以降は繭経済へのくみ込みによって資金需要量が増大していく一方で年賦金返済がどこおりがちになっていく。この原因は下層農民よりも上層農民の返済がどこおるためであると考えられるが、だからといって上層農民への貸附が減退していくのではなく、かえって多額の貸附が増大し、下層の農民への貸附が減退していくのである。この様に救護社は、明治期の共同救護から大正期の上層救護へと変質していくのである。

## 古代イスラエルの定着と都市集住に関する

### 諸問題について

小 渊 忠 秋

古代イスラエル人については、その持つ宗教的性格とともに欧米の関心を集めてきたが、近年盛んに発掘集収されている考古学的データをもとにより実証的で正確な把握が求められている。またイスラエル中心主義ともいふべき偏向から解放され、古代オリエント史の一要素という観点から見直す作業も盛んである。

拙稿ではこうした立場から、青銅器時代末より鉄器時代初期のいわゆる古代イスラエルの定着の様相について、具体的な事例をあげていくつかの問題を抽出しようと努めた。

青銅器時代に入って、シリア・パレスチナ地方では多くの都市国家が生成消滅し、後にイスラエルを形成した部族はその都市国家群の間で主として遊牧生活に携わってきた。紀元前約12〜11世紀に定着運動が展開され、その事情は旧約の歴史伝承の中に詳しく記されている。

定着は先住民との様々な軋轢を伴ったが、都市定着以前には数戸の血縁によると思われる小集団が各所に居を構え、農耕依存の度を強め、富を蓄積してゆく段階が存在したと考えられ、共通の患に対しては有能な指導者のもとに連合して戦闘を起すこともあった。

安定を得るに従って彼らはより好条件下の地区に占住するようになり、テルや地理的要所に集住し、その傾向は王制の施行によ

っても促進されたであろう。

発掘によって多くの都市の形態的構造の一部が明らかにされているが、家の各々について観察すると前述した数戸単位の小集団が居住した家屋と酷似する例が多い。これは都市居住によっても家族の構成や規模に大きな変化が無かったことを示すものであり、古代イスラエルの人口を考える際に大きな示唆を与えるものである。カナアン文化の多大な影響を受けながらも、基本的な所での保守的傾向は、彼らのその後の発展に大きく関わってくるのである。

### 古代中国における羽人について

— 漢代を中心として —

太田 阿 佐 子

古代中国においては特に漢代を中心として、図像上、文献上に多種多様な羽人が出現する。これらの羽人については、従来、中国東海岸に居住していた民族の鳥をトーテムとする信仰に基づくもの、あるいは鳥が霊界へ魂を運ぶとする信仰に基づくものとし、すべて同一の性格を有するものと規定されていた。しかしそれは羽人について極めて一面的な捉え方であり、羽人自体の性格を詳細に把握しているとは言いが得ないと思われる。

そこで、本稿では、漢代において、図像上、文献上に現われた多種多様な羽人(半人半鳥の形態のものを称す)を、鬼神的羽人と仙人的羽人に大別し、さらに鬼神的系統のものは三つの型式(人面鳥身型、鳥首人身型、人面鳥身蛇尾型)に、仙人的系統の

ものは五つの型式（初期的な型、不死草を持つ型、西王母東王公の側に待す型、鳥・龍・鹿・雲車などに乗る型、遊戯する型）に分類し得ることを明らかにした。また、それぞれの羽人の型について、その性格や意味を明らかにし、前時代のいかなる形態、思想を背景として出現したかについて概要を述べた。

さらに、古代中国における羽人の起源についても考察し、鬼神的羽人の人面鳥身型は殷代まで遡り得るものであり、鳥首人身型は戦国時代に突然出現したものであって、「鳥首」の観念は中国本来のものではなく外来の影響によるものと思われ、人面鳥身蛇尾型は後漢末以降になって初めて伏羲・女媧の人面鳥身蛇尾の羽人に完成されたものと考えられる。また、仙人的羽人については、中国東海岸地域における固有の信仰に求める従来の説に対し、『山海経』『呂氏春秋』『墨子』『淮南子』などの記述から、むしろ中国の西方及び南方の民族にもその起源を求められるのではないかということを描した。

## 十二世紀モンゴル社会における身分制度の形成

—「奄出」と“*ünkü bugui*”と“*inju*”をめぐって—

白岩 一彦

チンギス・ハン期におけるモンゴル帝国の形成に関するこれまでの研究は、その成因をチンギス・ハン個人の天才的素質に求める傾向が強かった。しかし、原典史料の比較検討によりチンギス・ハン期のモンゴル社会を分析してみると、モンゴル帝国の形成に最も貢献したのは、チンギス・ハン個人よりもむしろチンギス

・ハン家の直屬家臣団であったことが明らかとなる。この直屬家臣団は、モンゴル語史料には「奄出 孛斡勒 (*ancu bo'ol*)」、ペルシア語史料には“*ünkü bugui*”の形でそれぞれ見え、「御側衆」と訳すことができる。この「御側衆」の構成員は、チンギス・ハン家代々の家臣並びにチンギス・ハンに服属して功績をあげた個人であり、彼らがチンギス・ハン期モンゴル国家の支配者集団を形成し、残余のモンゴル人はその臣下となった。この「御側衆」集団は更に二つの組織に大別される。その一つはチンギス・ハンの親衛隊 (*Keshikren*) であり、いま一つは九十五千戸の千戸長とその子弟から成る千戸長集団である。チンギス・ハン期のモンゴル社会は、これら二組織から成る「御側衆」集団とそれ以外の臣民集団とに身分上大別されていた。この身分制度は、十二世紀後半のモンゴル社会の変動のなかでチンギス・ハン家代々の家臣を核とし、新参の家臣で功績顕著な者を加えて形成された。この「御側衆」という身分制度の形成を機にモンゴル帝国の社会構造が確立し、部族国定から中央集権国家への発展が可能となった。この意味において、「御側衆」集団の形成過程を分析することがモンゴル帝国史研究にとって根本的に重要な意味をもつてくる。更に、この分析の結果をイル・ハン朝期のハン直屬の家臣団 (*inju, injai-khass*) と比較研究することにより、ガザン・ハン期におけるイル・ハン朝国家再構築の実態を明らかにしうるのみならず、チンギス・ハン期からガザン・ハン期にかけて生じたモンゴル社会の変容をも検証しうるのである。

昭和五六年度提出卒業論文題目

〔国史学専攻〕

- |       |  |       |   |
|-------|--|-------|---|
| 笹田 茂樹 | 顯宗・仁賢両天皇の即位について                          | 盛本 昌広 | アジールの存在形態   |
| 中野 高行 | 北部九州と畿内勢力―那津宮家と筑紫大宰府―                    | 芝山 和子 | 六斎市設置の背景と領国経済について<br>―後北条氏を中心として―                       |
| 雨宮 守  | 蘇我氏の発展過程における仏教受容                         | 鈴木 則子 | 日蓮の女人往生思想について   |
| 浜田恵理子 | 氏族仏教から国家仏教への変遷                           | 金子 真理 | 安芸国小早川氏の領主制進展について                                       |
| 田中紀世史 | 『部民制』から『公民制』への移行過程                       | 松本 一夫 | 室町幕府の守護に対する国衙職安堵について                                    |
| 柳原 靖子 | 天武天皇の皇子女に関する二、三の試論<br>―その長幼の順と命名法を中心として― | 近沢 利子 | 戦国大名武田氏の在地支配について  |
| 高田ふゆき | 行基と律令国家の対立                               | 後藤 裕美 | 近世初頭における日本人の海外流出について                                    |
| 井橋 洋子 | 藤原仲麻呂について                                | 増田 篤樹 | 豊臣秀吉の外交・貿易政策についての簡潔な報告                                  |
| 田島 裕久 | 古代の売券についての基礎的研究                          | 松本 浩二 | 近世初頭駿府と長崎貿易についての再検討<br>―慶長十四年長崎糸座貨物配分と延宝三年<br>長崎貨物増録配分― |
| 詫間 学  | 初現期墳墓考                                   | 小泉智永子 | 川越藩新河岸の研究<br>―江戸地廻り経済圏との関係を中心に―                         |
| 富山 浩之 | 神観念の変遷について                               | 春日 重信 | 佐久間象山の海防論   |
| 中里 英介 | 鴨氏研究序説                                   | 山崎 雅人 | 尊皇論―吉田松陰を中心に―   |
| 福島 秀彦 | 倭五王の遣使について                               | 生島 裕子 | 幕末における土佐藩の立場と坂本龍馬の役割                                    |
| 鈴木恵津子 | 日本書紀における仏教伝来記事                           | 鹿野 由利 | 坂本龍馬―薩長連合から馬関商社に至る迄―                                    |
| 白倉奈津子 | 平城京の都城制                                  | 小林 和夫 | 龜山社中から海援隊に至る経済的動向とその性格<br>―坂本龍馬に注目して―                   |
| 恵 聖子  | 紫微中台の再検討                                 | 牧野 康弘 | 馬関戦争における長州藩   |
| 増田美恵子 | 正倉院のガラス器具                                | 金田 和子 | 仏国公使ロッシュの対日政策<br>―六〇〇万ドル借款契約をめぐる―                       |
| 飯盛 善夫 | 八世紀後半における木彫の成立                           | 半谷 讓  | 皇女和宮―その生涯と政治的背景―  |
| 和泉 尚  | 唐招提寺の形成                                  |       |   |
| 佐々木雅博 | 室町幕府奉行人の一考察                              |       |   |



清原 丈義 奥羽列藩同盟成立過程の一考察  
小野 靖之 民蔵分離問題と大久保利通

〔東洋史学専攻〕

丸山 和昭 漢代における鉄製農具の普及について  
山口 智 後漢の宦官——宦官を通してみる後漢王朝——  
横野 秀昭 古代中国に於ける「赤」の呪術  
高木 嘉子 『名公書判清明集』所録判例の一考察  
——「羅柄女使来安訴主母奪去所撥田産」条——  
石井 京子 上海独立後の民衆動向と立憲派の關係の一側面  
大江 英夫 広東西路事件（一八五六—一八六七）に関する一  
考察

中谷早木子 東南アジア華僑の徴税請負制度をめぐる一試論  
三浦 正子 ベトナム史における二徴蜂起について  
浅沼 立也 明治時代の日本におけるマホメット伝  
滝口 良子 アズム家のダマスクス統治（一七二五—一七五七）  
上田 祥市 タハ・フサインの自伝『わがエジプト』にみる教  
育  
川上久美子 一九世紀ブハラのマドラサ教育  
二村 友子 ガンデイーの不可触民解放運動とその思想

〔西洋史学専攻〕

森実 与子 コントにおける実証主義の成立とその克服  
石山永一郎 ハユートピアからヘディストピアへの歴史的

考察

伊藤 隆章 ローマ共和政末期の奴隷反乱  
崔川 陸子 第三次ポエニ戦役の原因について  
坪上 節子 アッシリア美術における有翼の精霊たち  
中川 隆 叙任権争前・後のドイツ国制に関する一考察  
渡辺 晶子 メデイチ家の興隆に関する一考察  
村上 英智 ドイツ農民戦争に関する一考察  
今井むつみ シトー会の修道理念  
山崎 至 コロンブスとその時代  
太田 夏美 マキャヴェリの『君主論』とその時代  
伊藤 明博 パリ・コミューンにおける民衆  
浦井 章代 帝国主義時代のイギリス外交  
福江 美奈 アメリカ合衆国における都市計画の発生と発展  
石井 政己 ワイマール共和制下におけるナチスの発展  
滝川 潔 文化現象としてのナチズム  
井手 直樹 英国労働運動と一九二六年のゼネスト  
星 衛 両大戦間期におけるアフリカ民族主義の動向  
今井 彰彦 二〇世紀におけるアルジェリア民族主義運動につ  
いて  
関口 祐宏 ヒトラーの反ユダヤ主義思想  
高瀬 徹 イギリスEC加盟についての一考察  
田中 契子 十字軍前史——序説——  
大沼 洋 イングランド初期封建王政の一考察  
上島 和彦 所謂 Bastard Feudalism

〔民族学・考古学専攻〕

- 中根佐和子 アッカド時代の円筒印章における女神像
- 荒幡 尚雄 日本への稲作伝来ルートの研究
- 中岡 承子 百済武寧王陵出土の金製耳飾について
- 棚橋 訓 ソロモン諸島マライタ島人工島社会の機能について

- 渡辺 静雄 トカラ・悪石島の仮面行事について
- 稲村 晃嗣 堀之内式土器の成立について
- 千葉 誠一 日本に於ける農耕の起源をめぐって

- 羽生 淳子 諸磯b式土器における文様組成比の推移に関する試論

昭和五六年提出修士論文題目

〔国史学専攻〕

- 湯浅 吉美 平安初期寺院制度に関する一考察  
——東寺における俗別当をめぐって——
- 木村 直也 幕末朝の対馬藩と対朝鮮政策
- 高輪 真澄 幕末における幕閣の動向について
- 平野 裕久 小田原藩における村筒制度について
- 井奥 成彦 近世後期における村落構造の変質と「小買商人」  
——下総国海上郡足川村を素材として——

- 高山 優 関東地方に於ける弥生文化の成立  
——土器型式及び土器組成の変質を中心として——

- 金沢 厚紀 律令賤民制成立過程に関する一考察  
——大宅朝臣賀是麻呂の賤をめぐって——

〔東洋史学専攻〕

- 家室 茂雄 清代社倉制度の一考察

〔西洋史学専攻〕

- 中山 幸夫 前四七九〜四六二年代のアレオ・ハゴス会議に関して——その権能とアルコン選出法改定の分析を通じて——

- 鈴木 邦夫 青年イタリア創設朝におけるマツツイーニの政治運動

〔民族学・考古学専攻〕

- 宮崎 充雄 播州そろばん工業の伝統性と基盤